

報告「学校動物支援のためのガイドラインと 全国の状況について」

中川 美穂子



日本獣医師会は、全国55の地方獣医師会に対して、平成21年度の各地区における学校の動物飼育支援活動について調査した。群馬県や東京都、岐阜県のように、早くから多くの支部が関わっている所もあれば、全く活動していない県もあったが、準備をふくめて7割を超す自治体の獣医師会が対応していた。一方行政の手当のある自治体は、1割ほどであった。これは、獣医師は人に及ぼす動物飼育の意義を明確に認識しているが、国民や自治体、また学校にとっては、未知の部分が多く、未だに動物の飼育方法や教育への活用法も不確かなまま課題を抱える学校が多く見られ、飼育の教育的意義を確認できないことが原因と考えられる。

本稿では、学校飼育が必要な基本的理由とともに学校の飼育の現状を伝えて、獣医師の支援の必要性と、その飼育支援体制の現状を示して、平成23年春に日本獣医師会が、上記調査結果とともに、この体制のあり方を地方会に示したガイドラインの一部を紹介する。全国獣医師会の調査結果は、パネル発表8として掲載する。

また、筆者などが行った飼育体験のあり方と児童への影響についての調査結果と、獣医師の支援体制のもと丁寧に教科に位置づけて飼育教育を行っている学校の資料を示す。これにより、学校での飼育体験の教育的活用の方向性が示すことができれば幸いである。

1 はじめに

古来より、子どもは動物を友として、愛情を懸けて、あげくに死なれ、命はよみがえらないことや、生命維持の実際と楽しさなど、将来の子育てに役立つ基本的な生物（生命育成）などの知識を得ていた筈です。が現在、街には犬も猫も目立たず、頼みの家庭での温血動物（抱けて、視線を合わせ、感情を交流できる）の飼育率は、4分の1にも届きません*¹。そのため、学校での動物飼育が推奨されており、地域獣医師の所属する獣医師会の元締めである日本獣医師会も、この問題の把握に努め、獣医師の活動のガイドラインを示すにいたりました。

(1) 小学校での飼育実例

都内の事例です。獣医師会と自治体との話合いで、会員獣医師が「家畜伝染病の検査」のために、ある小学校を訪問したとき、飼育舎の2つの部屋にそれぞれ居たチャボとウサギ、1匹ずつが、どちらもへたり込んでいました。そして、獣医師の顔を見たたん、その学校の管理職が「高齢で見えないから、2匹とも安楽死をして」と頼みました。担当獣医師の悲鳴のような電話に2日後に私も学校に伺い、動物の入院治療を許して貰いましたが、丁度この時、飼育舎で糞尿の中で倒れていたウサギは死にました。そのウサギには固い固形飼料を与えてあったため、「瀕死の者は固いものは食べられない」と話したところ、その管理職は「そんなことは自分には分からない」と声を荒げました。感染症学から言えば、鳥とほ乳類が同じ病気にかかることはほとんどなく、健康を害した原因は、鳥インフルエンザを危惧して毎週消毒をしていたことと推測されました。両者とも、床に接していた足の部分が消毒成分によって腐食し、神経症状が出ていました。生体である細菌を殺す消毒薬は、人や動物などの生体にとっても毒となり、小屋の消毒薬を生体にかけることは、知識さえあればとても出来ない筈でした。

幸いチャボは元気になり、2ヶ月後の退院のとき学校で、子どもが獣医師にすーっと寄ってきて、「ありがとう」と手を合わ

せて、ペコッと頭を下げてくれたそうです。それでその獣医師は苦勞が一気に報われた思いがしたそうです。なお、その後、チャボは教員室で手当と世話を受けていましたが、なぜか教員室は明るいムードとなり、1ヶ月後に再治療でそのチャボが入院したとき、先生方が「いないとさびしい」と言ってくれたと、喜んだ獣医師から報告がありました。つまり獣医師が居ない時は、不安にかられて、子どもの心配も引き受けられないまま、動物も、子どもにも、そして教師自身も辛い時をすごしていたということがわかります。

(2) 学校での飼育の課題

多くの先生方は動物の扱い方が分からないまま飼育を任されており、動物がひどい状態になる事を「仕方がない」と考えがちです。「強いものは育つけど、弱いものは死ぬ」「悪い環境なので辛い気持ちになる」ため、担当をやめたいと答えたり、「動物の状態に胸が痛くなるけど、仕方がない」と表現する教師も見られます*²。

それは子どもにも敏感に伝わり、前述の学校でも動物がひどい状態の時には、子どもたちは先生方に「助けて」と言えない雰囲気があり、だれもがその状態に気持ちが重かったのでしょう。前述の事例でも、今までの対応が正当だったかどうか不安で、管理職は獣医師に怒鳴ったのだと思います。実は保護者もとても心配していたと、後で聞こえて来ました。弊害が大きかった飼育と言えます。

以上のように、学校の飼育では獣医師の支援が必要ですが、この小学校の地区では、行政の獣医師への手当はありません。それでこの小学校の事例（往診して懇談し、ウサギの解剖や綺麗に洗ってドライヤーで乾かして花を添えた写真を撮り、学校に届けたこと。また、チャボを2ヶ月間入院させて、腐食していた足の裏の治療を行い、また再入院での治療など）の一連の費用と時間は全て獣医師個人が負担しました。動物の診療が生業の動物病院の院長たちにとって、これらの時間的・金銭的負担はよほどの情熱で支えられていても、なかなか大変なのです。

全国で、この活動に熱心に関わっている獣医師たちは、我が子を通じて学校の飼育の様子を見て何とかしたいと思った体験を持っています。幸せな状態の動物を大事な子どもたちに触れ合わせたいと思ったわけ

です。しかし、たまたま個人の獣医師の支援を受けるのではなく、どの学校でも同じように支援を受けられる体制にして、子どもも動物も学校も、そして獣医師も幸せになって欲しいと、願っています。

獣医師から見れば、大人を頼るところや無邪気さにおいて、動物と子どもは同じで存在です。

(3) 対応ができないと、子どもは傷つく

当方には、全国から学校の動物の状態を心配して、保護者や子どもたちからの連絡が入ります。彼等は、学校が受け止めてくれない場合には、哀れな動物の状態を改善させてあげられない自分自身を認める事が出来ず、傷つき、学校への憤りをずっと持ちつづけるようになります。小学校での飼育を訴えた中学生からの手紙を紹介します。

「最初、ウサギをほうきで追いやる子どもを見て見ぬふりをしていましたが、その子の笑い声が聞こえ、気がついたとき私はその子の胸ぐらをつかんでいました。そのあと私は何も言わずに帰りました。そのあと友人からその子達は前にもそのような虐待をしていたと聞きました。

そしてその子達はもう私と目を合わそうともしませんでした。更に、教師はそのことを何も知っていません。以前にも問題を先生に打ち明けても何も対処しませんでした。そのため私はもう何も言いませんでした。」・・・弱いものがいじめられているのを見たら、とても腹が立ち、何とか助けたいと思うのは人として当たり前のことで、それこそ大人達が、幼い子どもたちに培いたい心でしょう。

4人の子を育てた獣医師から見れば、子どもは大人の思惑を超えて、動物と直結しており、いつも心配し、共に楽しく過ごすことを望んでいることが分かります。

2 支援体制と学校獣医師の役割

全国約1万の動物病院と、2万人の行政や団体・会社に勤める獣医師達が所属する全国55の都道府県獣医師会の上部組織である社団法人日本獣医師会では、平成21年度の獣医師会による地域教育施設における動物に関する支援体制の調査をし、「全獣医師会の72%が支援体制を準備していましたが、事業として実践している自治体は15%弱にとどまっている」と報告しました(図1)、獣医師が学校に関わるために、以下のようなガイドラインを示しました。

40 都道府県に渡る 164 事例 (27 都道府県 123 市区町村 14 政令都市)

1129 市区町村 (27 都道府県) (注 1)+123 市区町村+14 政令都市=1266 市区町村 (72% / 全自治体) (注 2)
(内、自治体が事業化している地域は 255 市区町村 (14.6% / 全自治体)) (注 3)

1 連携の形態

・学校獣医師が教育長から委嘱されているところ

嘱託獣医師任命・茨城県 群馬県 蕨市・戸田市 内灘町 非常勤公務員扱い学校獣医師任命・八戸市

・その他は自治体からの委託契約が多い。しかし、中に治療費支払いの申し合わせのみで、指導なしの場合もある。

・農水省委託「家畜伝染病監視体制整備事業学校現場型」を引き継いで、県の事業として指定校方式で県内の 10 数校から数十校を指定して衛生検査と指導を行っている・滋賀県

(*) 印は事業化されていない。時に講師料のみ予算がでている。

(@) 大学あるいは附属小学校・園との契約で行政は関わっていない。

都道府県との協力体制

事業受託あり：〈行政の対応部局保健福祉・教育〉茨城県 〈行政の対応部局 教育・学校〉栃木県
〈行政の対応部局 家畜衛生〉滋賀県 奈良県
〈行政の対応部局 動物愛護〉群馬県

事業受託なし：*

〈行政の対応部局 教育〉北海道 青森県 宮城県 福島県 東京都 福井県 愛知県 三重県 大阪府
山口県 徳島県 福岡県 佐賀県 長崎県 宮崎県 鹿児島県 広島県
〈行政の対応部局 教育・学校〉山形県
〈行政の対応部局 教育・家畜衛生〉岡山県
〈行政の対応部局 家畜衛生〉長野県 和歌山県 熊本県

政令都市の連携

横浜市 川崎市 千葉市 福岡市 京都市 神戸市 さいたま市 北九州市 新潟市 浜松市 相模原市
大阪市* (動物愛護推進協議会) 静岡市* 名古屋市* 神戸市

市区町村との連携

青森県) 八戸市 青森市*

岩手県) 盛岡市*

栃木県) 佐野市 茂木町 大田原市 小山市 さくら市 宇都宮市 市貝市 那須塩原市 塩谷町

埼玉県) 蕨市 戸田市 所沢市 川越市 新座市 久喜市 志木市* 三芳町 草加市 ふじみ野市

入間市 狭山市* 朝霞市* 和光市* 熊谷市* 深谷市* 本庄市*

東京都) 渋谷区 練馬区 江戸川区 板橋区 世田谷区 杉並区 品川区 小平市 府中市 狛江市 国分寺市 西東京市

八王子市 調布市 日野市 清瀬市 武蔵野市 東久留米市 町田市 稲城市 小金井市* 東京学芸大学@

目黒区* 足立区* 千代田区* 北区* 葛飾区* 豊島区* 大田区* 江東区* 文京区* 港区* 中野区* 台東区*

中央区* 墨田区* 東村山市* 立川市* 国立市* 東大和市* 武蔵村山市* 昭島市* 福生市* 羽村市*

あきる野市* 青梅市* 瑞穂町* 奥多摩市* 日の出町* 檜原村* 八丈島村* 大島町* 新島村* 小笠原村*

神奈川県) 秦野市 藤沢市 茅ヶ崎市 大磯町 海老名市* 小田原市* 平塚市* 座間市* 大和市*

綾瀬市* 鎌倉市* 横須賀市 三浦市 伊勢原市* 二宮町*

千葉県) 柏市 市川市 習志野市 船橋市 君津市 浦安市 市原市* 他 46 市町村*

山梨県) 笛吹市

新潟県) 佐渡市 三条市 燕市

愛知県) 岡崎市 豊田市* 春日井市 小牧市 稲沢市 北名古屋市* 犬山市* 岩倉市

津島市* 弥富市* あま市* 安西市*

岐阜県) 岐阜市 山県市 各務原市 笠松町 揖斐川町 大垣市 神戸町 池田町 八百津町 美濃市 瑞穂市 関市

坂祝町 川辺町 美濃加茂市 可児市 中津川市 土岐市 飛騨市 高山市 木巣市 下呂市 岐阜大学@

静岡県) 上記政令都市以外なし 三重県) 四日市市 鈴鹿市* 津市* 志摩市*

滋賀県) 大津市 石川県) 金沢市 内灘町

京都府) 宇治市 大阪府) 東大阪市*

和歌山県) 橋本市* 奈良県) 奈良市*

愛媛県) 松山市 鹿児島県) 鹿児島市*

長崎県) 佐世保市 諫早市*

沖縄県) 豊見城市* 浦添市* 大宜味村* 名護市* 金武町* 那覇市* 嘉手納町*

(注 1・県単位で活動しているところは、全市区町村数で計算しているため、27 都府県で 1129 市区町村とした)

(注 2・全自治体数は 2010 年 4 月現在 1750) (太字は県単位で実践していないところ)

【2010 年 (社) 日本獣医師会調査報告を元に中川報告】

(1) 獣医師会が学校に関わる目的

①「愛情を感じる飼育」への支援

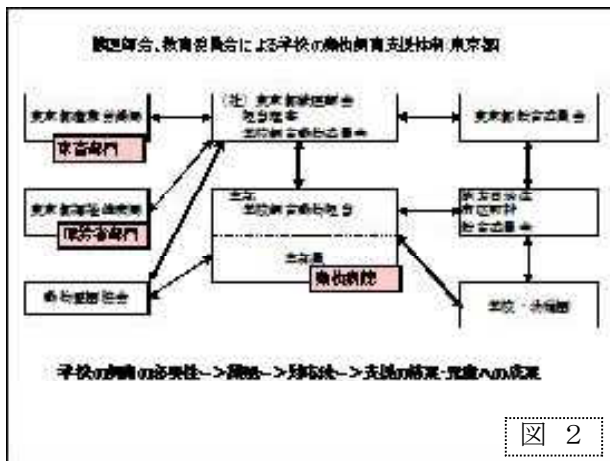
単に掃除と餌やりを担当する飼育ではなく、動物と子どもが交流し、お互いに楽しめる飼育が実現してこそ、子どもへの影響が大きくなるため、簡単に世話が終わりたっぷりふれあう時間が確保できる飼育に向けて、助言と支援をする。また子どもの心配に対応するため、必要に応じて診療や質問に応じる。

②人と動物の両者への衛生環境確保支援

獣医師は、基礎医学、薬学、化学などを修め、動物の診療、公衆衛生（人の衛生状態を確保）、家畜衛生（家畜の病気に対応・人にとって安全な食肉の提供）などを職域とする国家資格である。動物を愛護するだけでなく、このような基礎知識があって、安心して動物をかわいがることができる。

③学校が地域との調和を図れるよう支援

知識のないまま飼育活動をすることは、動物愛護家などの目には非情にうつることがあるため、性急な攻撃を受けたり、あるいは長く支援してくれていた地域のボランティアが学校を支配するようになることも見られている。このような場合、獣医師は、冷静な科学的視点と愛情ある扱いかたなどの知識をもって、学校と共に対応を考え、学校を守ることができる。



(2) 行政・獣医師会の連携体制

図2は東京都の体制だが、地域の学校は地域の獣医師を中心に対応することで、全国きめ細かく対応ができる。また具体的には、学校獣医師は、以下の活動をする。

①学校の相談相手として相談にのる

- ・診療や子どもへの授業支援、他

②飼育指導と助言・支援

- ・学校への定期訪問（年に1～2度）

（動物との接し方、習性、飼い方、健康

及び衛生管理支援等、教師と顔を合わせて懇談）

- ・教員研修に協力

③動物の死亡時の対応

- ・衛生課題回避のため、死因検索する
- ・子どもに死因を説明し慰める

④他、より良い飼育体験教育を目して関係者と連絡を取り合う

- ・教育委員会、校長会、PTAなどと

(3) 日本獣医師会の役割

日本獣医師会は、会員や社会、他団体との協力・協調の下、この獣医師の活動が全国に順調に広がることを目して、国に提言するとともに、地方獣医師会に以下のような役割を果たしていき、各地方会がその地域の学校や行政との信頼関係を構築し、すべての子ども達に有効な動物飼育を体験してもらえるように、それぞれの学校獣医師の活動を広めるように期待している。

①地方獣医師会の活動の情報を収集・提供

②地方獣医師会学校動物飼育支援担当者の情報交換の場

- ・地区連合大会
- ・日本獣医師会年次大会等

③獣医師向け研修会

- ・年次学会等で「学校獣医師養成」のため

④地方獣医師会の講習会を支援・講師紹介

- ・獣医師と教育者向け

⑤学校教育課程の適正な動物飼育の普及啓発

- ・子どもへの影響と教育的効果の調査結果を各界に発表
- ・全国学校飼育動物研究会や日本小動物獣医師会等を支援

3 丁寧な飼育の、子どもへの影響

(1) 動物飼育と子どもへの成長

子どもは、飼育動物を数ヶ月以上、動物の健康に気を配りながら世話を続ける中で、動物とのふれあいに気持ちをゆるめ、また餌を与える行為により、動物からなつかれて可愛く感じるようになり、その愛情の対象に死なれた時に命の大切さを実感します。また、大事な動物の命を守るために、良く観察して、その気持ちを洞察するようになり、対応を工夫するようになります。そして、弱い小さな愛するものを、自分が守っていると自負に、自尊感情を持つことができ、また自分の責任の大事さや達成感を感じることができるようになります。

以上のような一連の経過から、学校での

図3 (1)継続飼育して得られる影響

- 1) 命の大切さを学ばせる
 - ・生命尊重 ・責任感育成
 - 2) 愛する心の育成をはかる
 - ・情愛 ・自尊心（自己有用性確認）
 - 3) 人を思いやる心を養う
 - ・動物や友との共感 友と協力 謙虚さ
 - 4) 動物への興味を養う・・ 科学への入り口
 - 5) ハプニングへの対応・・問題を解決しようと工夫することが 生きる力につながる。
 - ・観察力 洞察力 決断力
 - 6) マザーリング（擬似育児体験）：
 - ・将来の子育ての基礎になる
 - ・生命維持の実際と注意点、楽しさを知る。
- (2) 動物への一時的接触でも得られる影響
- 1) 緊張を緩める・・癒し コミュニケーション促進
 - ・毛がほわほわしていて、丸い目がある動物をみると嬉しくなり、周りの人との会話が弾む。
- (3) 子どもの心の状態の指標・・
- 動物の扱い方で、その子の心の状態がわかる。
- ①動物への感性が未熟（知識と訓練がない）
 - ②自身が非常なストレスを受けている。
 - ・ストレスをはらすための代償行為
 - ③行為障害の診断基準の一つ（ICD-10）
 - ・6ヶ月以上続く、動物や他人への残虐行為

丁寧な動物飼育が子どもに与える影響について、筆者は図3のように紹介しています*³。

(2) 飼育形態による飼育の影響

①飼育に関わる子の3年間の縦断調査*⁴

筆者等は小学校4年生に、飼育の影響について三年間、「学年飼育をした児童の成長」を調査しました。この調査は、都下の「全員が飼育にかかわる4年生」（7小学校）と、飼育委員会が飼育するので「飼育しない4年生」（5小学校）に対して、飼育に関わる前の3年3学期（T1）と、飼育活動終了時の4年3学期（T2）に行い、個々の発達度を比較しました。また、これらの子ども達を、家庭で鳥類や哺乳類を飼

っている群と飼っていない群に分けて考察

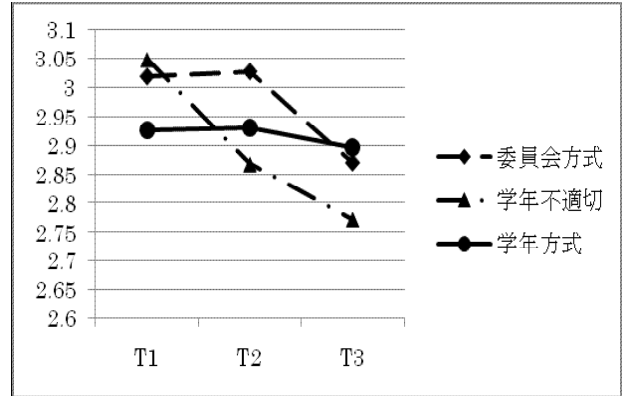


図4・各群3時点での向社会的態度の推移

しました。

調査対象校：全小学校に自治体による獣医師支援体制があり、飼育学年の4年生、あるいは飼育委員会に授業支援をしています。また、学年全員が飼育に関わる場合でも、飼育活動を総合の学習の時間に位置づけて獣医師を活用する小学校の4年生（1群・学年方式群）と、②授業に位置づけられてないため、獣医師の活用もなく、教師の指導もほとんど見られない小学校の4年生（2群・飼育不適切群）も見られました。対照群として、飼育委員会方式の小学校での、飼育に関わらない4年生（3群・委員会方式群）があり、これら3群に分けて比較しました。

測定内容；“走っている馬が倒れたら悲しく感じるだろう”，“犬は、夏に窓の閉まった暑い車の中にいるのはいやだろう”などの動物への共感性と，“順番で並んでいても、急ぐ人がきたら譲ってあげる”“親しくない友だちでも勉強を教える”など「他者への温かさ向社会的態度」や“学校に行くのが楽しいか？”などの「学校適応」を調査しました。

結果：「年間計画にそって、1学期飼育導入授業から3学期の下級生への飼育引継ぎ集会まで、丁寧に学年飼育を実施した学年方式群（1群）」は、「学年不適切飼育群（2群）や当該学年児童が直接に飼育に関わらなかった委員会方式群（3群）」に比べて、道徳性（他者への温かさ、向社会的態度）や学校適応において明らかに良い影響が見られました。

さらに、飼育終了一年後（T3）の調査では、飼育無しの委員会方式群（3群）は、一般に見られるように年齢に従って、社会

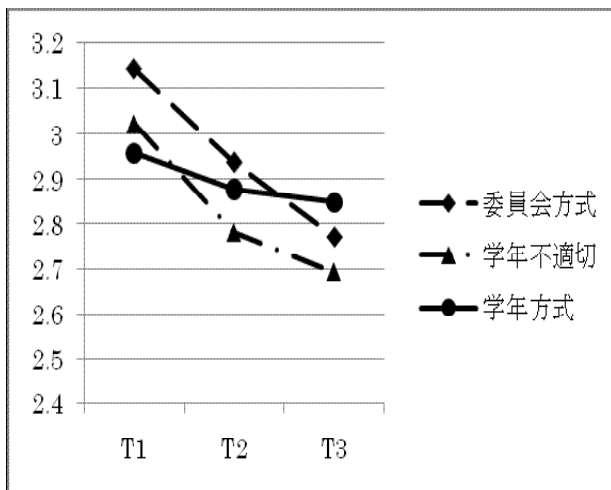


図5・各群3時点での学校適応の推移

性や学校適応性が低下する現象が見られましたが、学年方式群（1群）の子達は、飼育中に受けた良い影響が向社会的態度（図4）や学校適応（図5）において飼育終了後も続き、ほぼ横ばいで維持出来ていました。

考察：以上のことから、体験を抜きにした道徳教育は効果が薄れることと、丁寧な飼育活動には、現在求められている道徳的意義が非常に高い傾向があったと言えます。また、友人と一緒にを行う飼育活動と動物との触れ合いが、「友人との関係作り」や「学校が楽しくなる」効果を生むことも示唆されています。子ども達にはやはり、言葉の教育とともに、なにより、愛情をかけて、本気で誰かの世話をする体験が不可欠だ、ということでしょう。

②学校の感想

1群の調査対象校の一つ、保谷市立第二小学校の平成23年5月の学校便りの一面記事を紹介します。学校を支援する獣医師の存在と、学年飼育による教育の成果が読み取れます。

西東京市立保谷第二小学校学校だよりから
「子供が育つ」 ホニ小の飼育活動

（前略）さて、ホニ小での2年目を迎え改めて感じているのは、学校全体に「子供達が育つ」雰囲気が満ち溢れていることです。昇降口に掲げる『みんなで育てるホニホニの街 みんなが育つ保谷第二小』の言葉は、協力を惜しまない保護者や地域の方々（おこがましいですがよく努力する教職員も）と、学習や行事等に一生懸命取り組む子ども達の姿をまさに表しています。こ

の3月に本校を離れたある教師は、お別れの会で「保二小は、日本一は言い過ぎかもしれませんが、間違いなく、東京一です。」と断言しました。私も同感です。この有難い雰囲気が育まれる背景には、PTA活動をはじめとする保護者の皆様の理解と協力、児童の安全や豊かな教育活動を支えてくださる防犯協会や地域ボランティアの皆様の力があることは疑いもありません。その他数多くある要因の一つに、4年生が全員で取り組む飼育活動があると、私は考えています。

日本獣医師会は、学校飼育動物を「子供の成長を助けるために学校・園で飼育されている動物たち」と定義づけています。東京都獣医師会の地域獣医師に指導を仰ぐ本校の飼育活動は、担任の共通理解のもと年間計画に沿って、意図的・実践的に子供達の成長を促すべく展開されています。子供達は身をもって命に触れ、その命を守るべき責任を感じながらお世話をします。糞の始末、えさの下処理、散らかった小屋の掃除等々、3年生から進級したばかりの4年生には、大変な作業です。ときには、命の誕生や死に立ち会うこともある。そのときに子ども達は命とは何か、そのはかなさや尊さ・大切さを、知識でなく、言葉でなく、体験を通して学んでいくのです。しかし、そんな大人達の思いは受け止めながらも、子ども達は生来の純粋さで動物をかわいがり慈しんでいます。1年間、今の5年生がチャボやウサギを世話する場面を見てきましたが、本当に一生懸命に、そして嬉々として取り組む姿に感心し、その度に賞賛と感謝の言葉をかけてきました。命を守るためにみんなで協力し、働くことの喜びをしっかりと感じている子ども達です。このことが、ホニ小に「子どもが育つ」雰囲気を生む大きな力の一つになっていると感じるのです。

また、本校にも友達同士のからかいや悪口がないわけではありません。しかし、度が過ぎた「いじめ」は少なくとも私が見てきた1年間はありませんでした。これも、身をもって命のはかなさを知り、守るべきものの存在を感じながら動物のお世話をしてきた飼育活動の成果の一面ではないでしょうか。

お休みの日にお子さんと一緒に動物のお世話をしてくださる保護者の存在もたいへん有難いものです。思いやりの心、奉仕する心を育む本校の特色「飼育活動」を、ま

た今年度の4年生が引き継いでいます。これからも、その姿を見守り、応援しつつ、大切にすることで、ホニ小のよき伝統を紡いでいきたいと思っています。

(転載終わり)

4 最後に

学校での動物飼育は、成果が数値で測れず、かつ休日の世話や毎日の細かい心遣いなど面倒ばかりが目につきます。しかし、獣医師の支援を得て対応が楽になると、先生方は、安心して動物を見つめ可愛さに気付くようです。だれもがお互いの優しさを感じて心が軽く和やかになります。

「教育とは夢を買うこと」と言いますが、「可愛いものは可愛い、可哀想なものは可哀想とを感じる普通の感性」を持ってもらうため、子どもから訴えがあったら、動物の事を可哀想に思っている子どもの気持ちを大事にして対応したいと思います。その大人の対応で、その子は自信を持って周りに関わっていけるでしょう。子どもにとって必要なのは、自分の感情を大事してくれる大人の存在、つまり愛されていると感じる事と、大人への信頼ではないかと思っています。動物はそのための、子どもの気持ちを揺さぶる、とても良い素材だと言えます。

子どもは国民みんなの共有財産と獣医師も考え、それぞれの地域で我が子を育てている専門家として学校を支援しようとしています。学校の先生方は、専門家の智慧の支援を受けて、より安心して、より楽しく飼育活動を子ども達に与えていただきたいと思います。

(本会事務局長／社)日本獣医師会学校飼育動物飼育支援対策委員会副委員長)

(参考文献)

*1 中川等「家庭での飼育状況」「動物飼育と教育」p45 vol.6 2007

*2 鳩貝, 中川等 「小学校における飼育動物に関する調査」 初等中等教育における生命尊重の心を育む実験観察や飼育のあり方に関する調査研究(課題番号11680202) p82-84 2001

*3 中川美穂子「小学校での動物飼育の意義と獣医師による飼育支援」生物教育43巻 3号139-146 2002-2003

*4 中島・中川・無藤「学校での動物飼育の適切さが児童の心理的発達に与える影響」日本獣医師会雑誌 vol.64 No. 3 p227-233 2011



図6・3年への引継ぎ集会で・動物の絵に伝えたいことを書き込んだ4年生

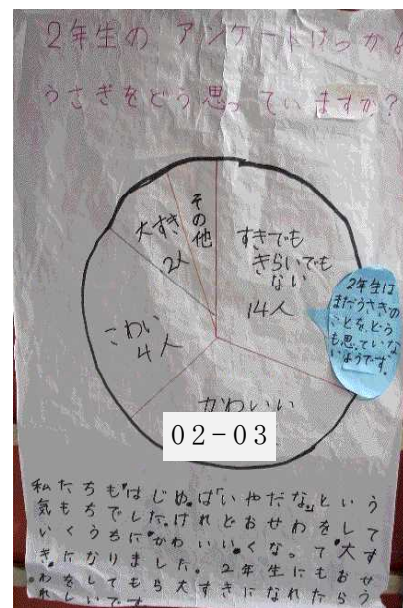


図7・3年が飼育学年の学校の飼育引継ぎ集会・3年生による2年生の意識調査結果と、2年へ「かわいがって欲しい」との3年生のメッセージ